13	お茶の水女子大学附属幼稚園	H30～R4

令和４年度研究開発実施報告書（要約）

１　研究開発課題

幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園の教育課程（３歳児～５歳児）の編成及び保育の実際とその評価の在り方についての研究開発

２　研究の概要

核家族化、情報化等の社会的背景のもと、家庭や地域社会における教育力が低下している。本研究において、入園前後の子どもや子育ての実態を調査したところ、子育てに悩む保護者の姿が浮かび上がり、本園の保育のグランドデザインを見直す必要性が出てきた。教育目標を「子どもへの願い」と改め、教育課程には「関わりの中で育ち合う」という子ども観や関わりの視点を反映させ、保護者の安心や理解を得るための対話を重ねた。その結果、家庭と園とが子育てについて共に考えていく姿勢が生まれ、教師間でも子どもの育ちを共有しようとする連携が強まった。また、入園前後と小学校入学前後の子どもの発達と学びの連続性を保つための接続期カリキュラムを作成した。その際には、子どもと教師の「身体性」に着目した教師の関わりの大切さを見出した。これらのカリキュラムに基づいた実践を蓄積し、近隣の幼稚園等施設との対話を重ね、地域に開かれた教育課程の実現を目指した。

３　研究の目的と仮説等

（１）研究仮説

① 研究の目的

・幼稚園入園前からの接続と小学校への接続という２つの接続に着目することで、幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園教育課程の編成を目指す
・社会に開かれた教育課程の編成を目指す

② 研究の仮説

幼児の発達と学びの連続性を踏まえた教育課程を編成することにより、幼稚園等施設が、２歳児の育ちを理解しながら３歳児を受け入れ、３歳児から５歳児の保育の質を保障し、そして小学校の学びへとつなげていくことができると考える。

また、この教育課程を社会に開いていくことは、地域に過ごす子どもたちの育ちや子育てを支え、幼稚園等施設における保育の質の向上とともに、子育てに対する保護者の意識の変容をも促すと考える。

（２）教育課程の特例

特になし

４　研究内容

（１）教育課程の内容

① 教育目標を「子どもへの願い」へ

本研究では、入園してくる子どもと保護者が安心して幼稚園へとつながれるように、また、在園の保護者が安心して園生活を送れるようにと、２歳児の生活や保護者の子育てに関する現状把握、在園の保護者との対話等に努めてきた。その過程において、子育てをする保護者が子どもの自立を急ぐ傾向にあること、子育てにおいて周りに頼れずにいること、子育ての正解を

求めていることなどが分かってきた。それは、本園が考える「子どもは自ら育とうとするもの」という子ども像や、「子どもの主体性を大切にする」という保育の方針とはなじまず、本園の保育のグランドデザインについて、もっとわかりやすく保護者に発信できるよう、見直す必要性を感じるに至った。

そこで私たちは、本園がめざす子ども像や教育目標について再考した。かつて本園の主事であった倉橋惣三が、その著書『育ての心』の冒頭で「自ら育つものを育たせようとする心、それが育ての心である」と言っているように、私たちは、「子どもは自ら育つもの」であると捉え、自ら育とうとする子どもたち一人ひとりに、思いをかけ、願いをもって、その時々を丁寧に関わるという保育者としての基本姿勢を教師間で共通理解した。教育目標については、まず内容の検討を重ねた。従来の教育目標は６つの項目からなり、内容としては具体的で分かりやすい反面、到達項目的、評価的に捉えられかねないという懸念があった。また、子育てに関して正解を求めがちな傾向がある中、子育てについて家庭と園とが共に考え探究していくことを大切にしたいという考えから、教育目標を「子どもへの願い：自分のことを大切にする、周りの人を大切にする、環境を大切にする」と改めた（図１）。

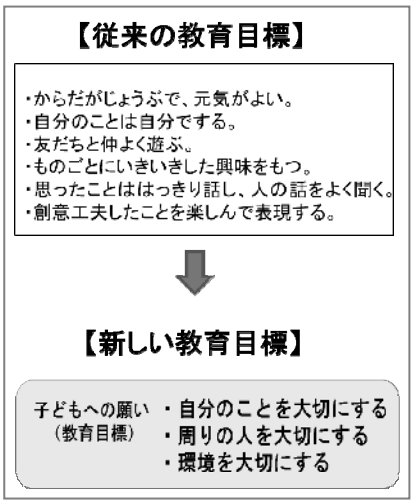

図１　教育目標の変遷

②　「子どもへの願い」の意義

「子どもへの願い」を考えるにあたり、私たちは、子どもたちに何を願いながら保育をしているのか、ということについて改めて議論した。「主体的に過ごしてほしい」「自分らしくあってほしい」「自分だけでなく、他の人のことも考えられるように」などの願いを挙げつつ、最終的に以下の３つに定まった。

・自分のことを大切にする
・周りの人を大切にする
・環境を大切にする

「自分のことを大切にする」ためには、子どもたち一人ひとりが、幼稚園の生活の中で、ありのままの姿を受けとめられ、「自分は大切にされている」と感じられることが前提にあると私たちは考えている。周りの大人の関わりを通して、大切にされているという感覚を持つことが、やがて自分だけでなく、「周りの人も大切、みんなが暮らす環境も大切」という気持ちへとつながっていく。

私たちが考える子どもへの願い、「自分のことを大切にする」「周りの人を大切にする」「環境を大切にする」、この３つの願いは互いにつながり合っているものであり、子どもたちに、自分のことのみならず、周りの人、そして共に生きる環境についても考え、大切にしてほしいと願うものである。

③ 教育課程の特徴

・関わりの視点で捉える教育課程

本園の教育課程では、上述のように「子どもへの願い」とのつながりを表しつつ、「関わり」を重視したいと考え、「自分とのかかわり」「人とのかかわり」「もの・こととのかかわり」という、３つの関わりの視点を軸に据えた。子どもたちが、自分自身と関わり、周りの人と関わり、身の回りのもの・ことと関わり合いながら、主体的に過ごし、育ち合う姿を、学年ごとにまとめ、教育課程に表した（図２）。

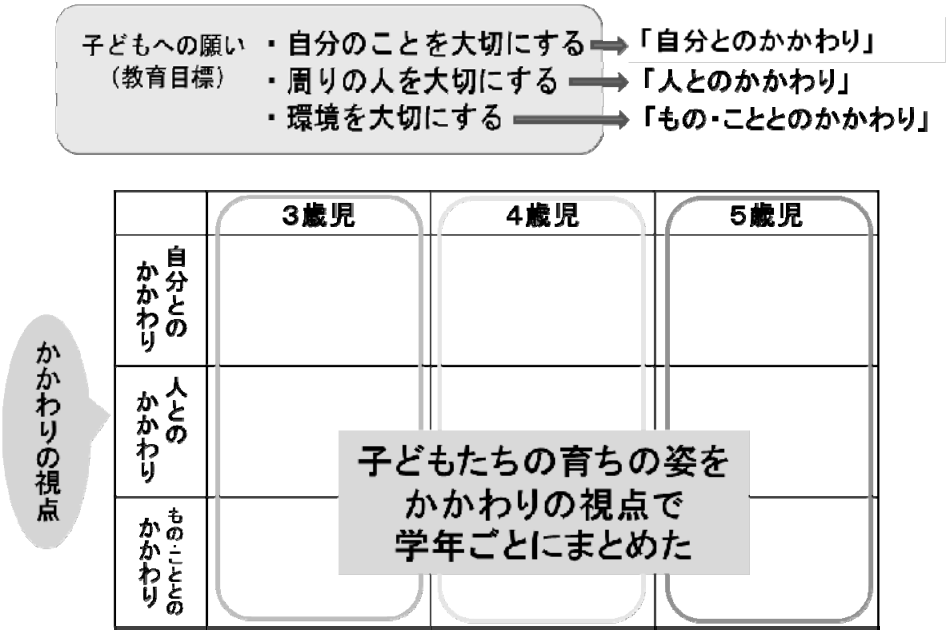

図２　関わりの視点で捉える教育課程

・発達と学びの連続性を踏まえた教育課程

平成 13～15 年度、附属小学校と本園とで、「関わり合って学ぶ」をねらいとして幼小接続の連携研究に取り組み、「幼小接続期」を設定した。また、平成 17～19 年度には附属中学校も加わり、「幼・小・中 12 年間の学びの適時性と連続性を考えた連携型一貫カリキュラムの研究開発」に取り組み、「なめらかな接続」と「適度な段差」をキーワードに据えた幼小接続期カリキュラムを作成した。この２つの先行研究を踏まえ、本研究では、入園前からの接続にも着目した教育課程の編成に取り組んだ。

＜入園接続期カリキュラム＞

入園接続期を設定するにあたり、入園前後の実践や保護者とのやりとりから、**「ゆるやかなつながり」**と**「安心」**をキーワードに据え、以下のように定義した。

入園接続期…入園前の子どもの育ちを踏まえ、入園に伴う子どもと保護者の期待や不安を受けとめながら、家庭と園とがゆるやかにつながり、安心感を得られるように支える時期

接続期の期間についても検討したが、子どもたちの経験や育ちの姿は多様であることを踏まえ、一人ひとりのリズムに合わせることにした。さらに、私たちが学んできた２歳児らしさを大切にしつつ、ありのままの姿を受けとめ、幼稚園の生活に早急に合わせていくのではなく、ゆるやかにつながっていくことで、幼稚園が安心できる場となっていくように、という思いを込めた。

入園接続期のねらいとしては、「子どもへの願い」を柱として、特に大切にしたい内容を、教育課程の３歳児の内容とのつながりの中で検討し、以下のようにした（図３）。

【入園接続期　子どもへの願い】
- ○ 自分のことを大切にする：ありのままの自分でいられる
- ○ 周りの人を大切にする：安心できる大人と出会う
- ○ 環境を大切にする：お気に入りのもの、好きなこと、安心できる場所がある

図３　入園接続期カリキュラム　「子どもへの願い」

この時期の保育の環境構成や教師の援助については、「子どもの育ちを支える教師のかかわ

り」として、保護者とのやりとりも加えてまとめた。入園接続期の子どもたちは、これから様々な関係を結んでいく。そのためにはまず、身近な大人である教師が、言葉だけに頼らず、お互いの身体を通じて関わり、関係の基盤を築いていくことが必要であると考える。そこで、ここでは子どもと教師の「身体性」に意識を置き、教師の関わりのポイントとして以下のように色囲みで表した（図４）。ここで言う「身体性」とは、子どもと教師とのあいだにある応答的な関係性のことである。

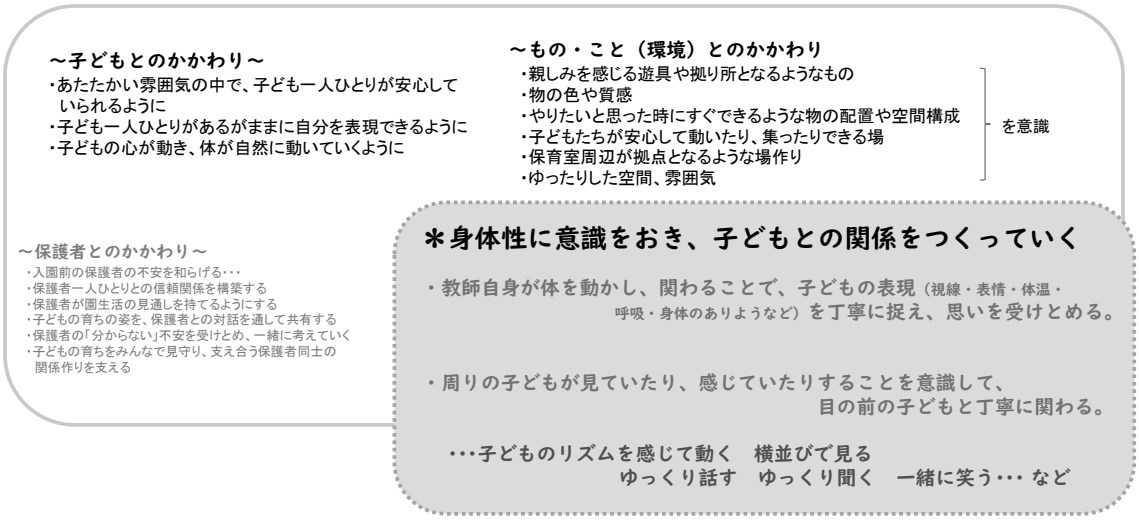

図４　入園接続期カリキュラムにおける教師のかかわりのポイント

＜幼小接続期カリキュラム＞

幼小接続期を設定するにあたり、子どもたちの関わりが広がり深まる時期を考慮して、５歳児２学期 10 月以降（接続期設定当時と同様）とし、以下のように定義した。そして安心を基盤にした**「なめらかな接続」**と、幼小それぞれの教育の違いや独自性を大切にした**「適度な段差」**を幼小接続期カリキュラムのキーワードに据えた。

幼小接続期…人との関係や周囲の環境が大きく変化することに伴い、子どもたちの戸惑い・不安・期待・緊張などを、教師が丁寧に受けとめ、支えながら、教師や友達との豊かな関わりを基盤に、主体的に学ぶ姿勢を育む時期

幼小接続期のねらいとしては、「子どもへの願い」を柱に、教育課程の５歳児の内容とのつながりで検討し、以下のようにした（図５）。

【幼小接続期　子どもへの願い】

○自分のことを大切にする：自分に自信をもち、自分らしくある
○周りの人を大切にする：違いや多様であることを認めあいながら生活する
○環境を大切にする：仲間とともに丁寧に生活をつくりだす

図５　幼小接続期カリキュラム　「子どもへの願い」

幼小接続期の子どもたちは、それまでの生活の積み重ねの中で、様々に関係を結んできている。その関係をさらに広げ、深めていくために、教師は子どもたちの関係を捉えて支えていく関わりが必要であると考え、教師の関わりのポイントとして次のようにまとめた（図６）。

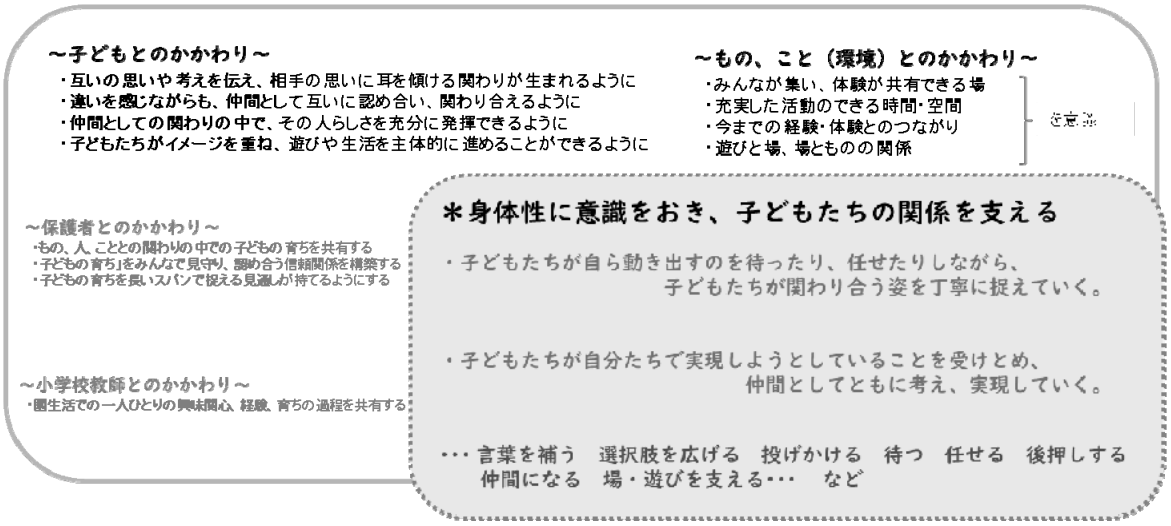

図６　幼小接続期カリキュラムにおける教師のかかわりのポイント

幼稚園教育要領の「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と、本園の保育とのつながりについては、以下のように考察した。

「育みたい資質・能力」として掲げられている、①豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、わかったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、②気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力の基礎」、③心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱は、いずれも、子どもたちが身の回りのもの、人、ことと豊かに関わり合う中で育まれていくものであると考えた。幼児期の体験の一つひとつの積み重ねが、小学校以降へとつながっていくことが大切であることを教師間で改めて確認した。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても、本園の「子どもへの願い」に含まれることを確認し、総合的な育ちの姿として念頭におくこととした。

（２）保育の評価の在り方

幼稚園教育要領解説では、評価について、「反省や評価は幼児の発達の理解と教師の指導の改善という両面から行うことが大切である」としている。本園では、以下のように日々の保育を振り返り、記録し、次の保育に活かす取り組みをしている。

・日の省察：対話型マップ記録

本研究の二年次より取り組んでいる対話型マップ記録は、中央に園内図が印刷された用紙１枚に、学年を担当する３人の保育者が、語り合うように記していく記録である。連携して研究にあたっている学内保育施設のいずみナーサリーで行われていた、「語り合うように書く記録」からヒントを得、３人の保育者がその日の保育で印象に残っていることを自由に書きたいように記すが、他の人の記録に応じるように書き重ねたり、保育者の思いを共有したり、悩みや戸惑いに触れ、それぞれの思いを書き連ねたりなど、用紙上での「対話」を意識において書くようにしている。保育中の子ども同士のやりとりに、記録上での保育者間の対話が重なった形になっており、時間の流れやプロセスの可視化を目指した。時に書けない日があったり、書けない人があったりすることにも意味があると捉え、保育の一日を網羅するような記録とは性質を異にする。中央のマップは、そこから矢印を伸ばし、遊びや生活が展開された場所を具体的に示すために用いる場合もあれば、記録を書く上での空間把握に役立てることもある。この記

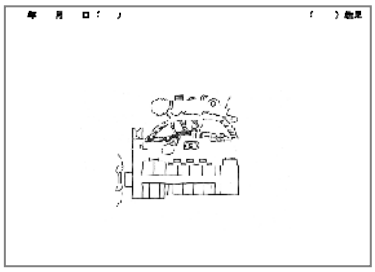

図７　対話型マップ記録用紙

録の特徴としては、複数の教師が対話的に記述していくことで、子どもたちの出来事や関係性が見え、子ども理解を促進するということが考えられる。

図８　保育者３人による記録の変遷（2021 年 11 月２日　５歳児学年）

・週の省察：週案「前週の子どもの姿」、及びドキュメンテーション

週ごとには、日々の対話型マップ記録や写真記録などを振り返り、学年ごとに、前週の子どもの姿としてまとめていく。その際には、教育課程の関わりの視点「自分とのかかわり」「人とのかかわり」「もの・こととのかかわり」で子どもの姿を捉え、週案の冒頭に記載し、翌週の週案の計画・作成に活かしている。併せて、保育の写真とコメントを記載したドキュメンテーションも作成している。このドキュメンテーションは、記録となるだけでなく、学年ごとにファイルにしたり、掲示板に貼ったりして、保護者にも閲覧してもらい、保育や子どもの姿を発信するツールとしても活用している。また、このドキュメンテーションと共に、保護者がコメントを書けるように付箋を用意し、家庭と園との対話が生まれる工夫をしている。このドキュメンテーションでは、子どもの様子が見えるだけでなく、本園の教育課程の「関わり」の視点や、子どもの育ちの過程が伝わることを心がけている。

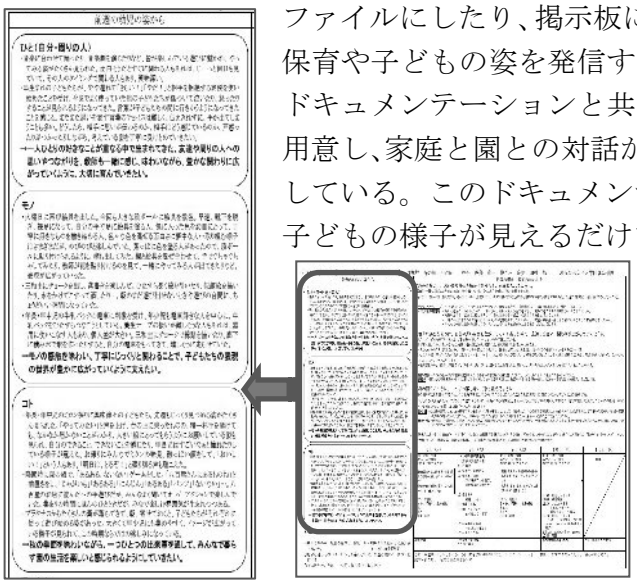

図９　週案　前週の子どもの姿

図 10　ドキュメンテーション

・期の省察：遊びと生活の履歴、及び個人記録

「遊びと生活の履歴」とは、子どもの遊びや生活、子どものつぶやき（姿）や保育者の思いなどのつながりについて、ウェブ状に記録したものである。各学年の教師が、学期ごとに、日々の記録や週案等を振り返り、子どもと遊びや生活とのつながりを捉えながら作成している。これにより、子どもを主体とした生活や子どもから始まる遊びの流れが分かり、教師の援助や環境構成のポイント等が見えやすくなった。本園では、この履歴を、次学期の見通しや計画につなげることがで

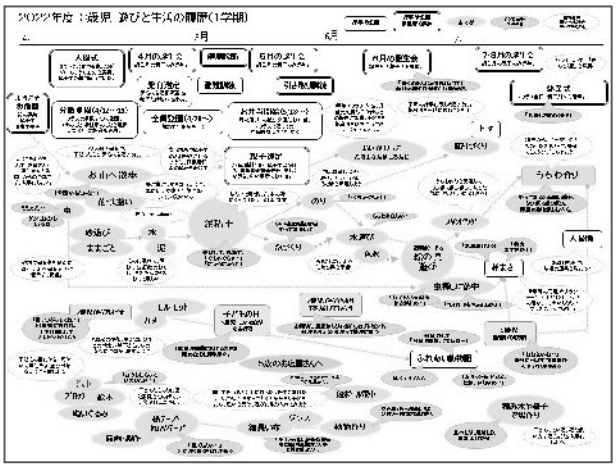

図 11　遊びと生活の履歴

きると考えている。私たちは、期ごとの指導計画を作成せず、この履歴を蓄積することで、次学期や次年度の見通しをもち、計画へとつなげている。そうすることで、教師が考える計画にとらわれない、子どもの姿や思いから始まる保育を実現できると考えている。また、学期ごとに個人記録を作成。子どもの姿だけでなく、教師の関わりのありようや保護者との関わりなども含めて記述し、一人ひとりの育ちを振り返る機会としている。これらの記録をもとに、学年末には指導要録を作成したり、教育課程の修正を行ったりして、次の学年、小学校へと丁寧につないでいきたいと考えている。

以上に述べてきたように、本園では、日々の省察から、週、期、年と、子どもの育ちについて記録上での対話や実際の語り合いを大切にし、保育の省察を重ね、次のよりよい保育に活かしていく営み、それが本園の保育の評価の在り方であると再確認した。また、今年度新たに、地域に開いた「保育を語り合う会」を実施した。こうした研究会における本園の保育の評価も活かしていきたい。

（３）研究の経過

	実施内容等
第一年次	①２歳児の育ち、保育の現状把握 ・学内の３園（本園、いずみナーサリー、こども園）並びに文京区の幼稚園・こども園の保育観察、合同研究会を実施。また、３園の保育者が相互に観察者、保育援助者として関わり、０～３歳児の育ちについて話し合うことで理解を深めた。 ・国内の乳幼児施設を訪問し、保育や子育て支援等の取り組みを視察。 ・在園の３歳児保護者及び２歳の弟妹がいる保護者と副園長との懇談会「ホットモタイム」の実施。 ②教育課程試案の編成 ・安心／出会い／葛藤／探求／安定の５つのステージと、モノ・ヒト・コトの３つの観点で子どもの経験する内容をまとめた。
第二年次	①２歳児の生活及び子育ての実態調査 ・文京区の幼稚園・保育所・こども園に協力を依頼し、「（２歳前後の）子どもの生活及び保護者の子育てに関する意識と実態調査」を実施。 ②グランドデザインの見直し及び教育課程試案の修正 ・６項目の教育目標を３つの「子どもへの願い」と改めた。 ・教育課程を、出会い／葛藤／探究という育ちの過程で表すと同時に、学年ごとの年間指導計画を作成した。 ③家庭との対話 ・前週の子どもの姿のドキュメンテーションを作成し、保護者に閲覧してもらうと同時に、付箋でコメントを書けるようにした。 ・在園の３・４・５歳児の保護者対象にホットモタイムを実施。 ④保育記録の改良 ・日々の記録に対話型マップ記録用紙を用い、学年３人の教師が対話するような形で書き留めるようにした。
名目指定	①家庭との対話 ・「研究だより」「学年だより」を作成し、保育や研究について発信するだけでなく保護者と共に考える機会とした。 ②『育育手帖その１』の発行、配布
第三年次	①教育課程試案の再修正 ・「子どもへの願い」につながる関わりの視点（自分とのかかわり、人とのかかわり、もの・こととのかかわり）で、学年ごとの子どもの育ちを表した。 ②入園接続期カリキュラムの作成 ・入園接続期の取り組みとして、育育手帖の配布、分散登園等を実施。 ・三園合同研究会（２歳児研究会）を実施。そこでの学びを活かし、「安心・ゆるやかなつながり」をキーワードに据えたカリキュラムを作成。 ③幼小接続期カリキュラムの作成 ・「なめらかな接続･適度な段差」をキーワードに据えたカリキュラムを作成。 ④家庭との対話 ・『育育手帖その２』を発行。文京区内の乳幼児施設や入園前の保護者に送付。

	・子どもの誕生月別に３学年の保護者が入り混じったホットモタイムを実施。 ⑤保育の評価の在り方について検討 ・期ごとの「遊びと生活の履歴」を作成し、保育の見通しや計画に活用。 ・日、週、期、年と子どもの育ちについて保育者間で語り合い、省察を積み重ねていくことが、次のよりよい保育につながることを確認。 ⑥大学と３園が協働し、保育研修及び子育て支援事業として「こどもフォーラム」を開催。
第四年次	①教育課程に基づいた保育実践及び教育課程の修正 ・保育実践を積み重ね、子どもの姿を教育課程に照らしながら検証する。 ②接続期カリキュラムの修正 ・子どもの育ちを支える教師の関わりのポイントとして「身体性」に着目し、入園接続期には「子どもとの関係をつくっていく」、幼小接続期では「子どもたちの関係を支える」という教師の関わりのありようをまとめる。 ③地域とのつながり ・文京区公立幼稚園に開いた「保育を語り合う会」を実施。 ・『育育手帖その３』を発行、入園前の保護者や地域の乳幼児施設に配布。 ④研究成果の発表 ・研究開発学校フォーラムにて研究成果の発信（１月）。 ・公開保育研究会にて研究成果の発信（２月）。

（４）評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	①３園の保育者で連携し、保育観察後の話し合いや三園合同研究会等を通じて本園の教師の援助や環境構成について省察する。 ②運営指導委員会による指導の上、二年次の研究デザインの修正を図る。 ③公開保育研究会を開催し、実践者・研究者等有識者の中間評価を得る。
第二年次	①３園の保育者で連携し、保育観察後の話し合いや三園合同研究会等を通じて本園の教師の援助や環境構成について省察する。 ②運営指導委員会による指導の上、三年次の研究デザインの修正を図る。 ③公開保育研究会を開催し、実践者、研究者等有識者の中間評価を得る。 ④教育課程試案に基づいた保育実践の省察、及び、アンケート等を実施し評価を得る。（アンケートの対象：公開保育参加者等）
第三年次	①接続期カリキュラムのプレ実施と振り返り及び修正。 ②教育課程に基づいた保育実践の省察、及び、アンケート等を実施し評価を得る。（アンケートの対象：本園教員及び保護者、附属小学校の教師等） ③実践者、研究者等有識者による保育観察を実施し、中間評価を得る。 ④運営指導委員会による指導の上、四年次の研究デザインの修正を図る。
第四年次	①三園合同研究会、及び保育を語り合う会等の研究会を行い、教育課程について検証する。 ②教育課程に基づいた保育実践の省察、及び、アンケート等を実施し評価を得る。（アンケートの対象：在園の保護者及び卒園児(現１・２年生)の保護者） ③研究開発の評価及び教育課程の検証の一環として、運営指導委員による保育観察を実施し、評価を得る。 ④研究開発成果報告会（公開保育研究会）を開催し、実践者、研究者等の評価を得る。特に、地域の幼稚園等施設の関係者を招き、コメントを得る。

５　研究開発の成果

（１）実施による効果

① 幼児への効果

入園接続期について丁寧に考え、子ども・保護者・教師とのやりとりから生まれる「安心」を基盤に、家庭と園とがなめらかに接続できるようにと、様々な取り組みや保育の実践を行ってきた。具体的には、入園前に『育育手帖』を配布し、「ようこそようちえん」を実施して親子で事前に来園する日を設けるなどの取り組みをしてきた。そのことで、親子共に園に親しみを感じ、生活をスタートさせることができていた。また、入園式の持ち方、入園後の時差登園やクラス半数による分散登園・保育等では、人数が少ない、ゆとりのある時間・空

間、静かな環境等の中、落ち着いて過ごす園児が多く、新しい環境との出会いや、生活の変化に対して、一人ひとりのリズムが尊重され、子どもだけでなく、保護者の安心につながっていた。行事等に関しては、３歳児に限らず、実施方法や学年ごとの参加の仕方を見直し、行事を行わない・学年によっては行事に参加しないことも含めて選択してきたことで、日々の生活が子どもたちに無理なく積み重ねられていた。

「関わり」を重視した教育課程を編成したことで、学年はもとより、学年を越えて子どもたちが関わり合う姿を、教師間でも共有しようとする姿勢が強まっていった。その結果、子どもたちの中にも、豊かな関わりが見られるようになったと考える。

幼小接続期について、接続前期に入り始めた頃に行うチームの取り組みにより、いつもの生活の中では関わることが少ない友達と出会い、一つのことをみんなで決める話し合いや気持ちを合わせて力を出し切る経験を重ねてきた。自分の思いが他の人に伝わる心地よさを体験し、友達の話を聞いたり、友達の良さに気づき、互いに認め合ったりしながら、チームのメンバーで一つのことに向かう気持ちが生まれた。その積み重ねにより、自ら自信をもち、周りの人や環境を大切にすることも学んでいるといえよう。

② 教師への効果

本園の教育課程は、子どもの発達と学びの連続性を踏まえるという目的で、「接続」に着目し編成された。この過程で、入園前後と小学校入学前後の接続だけでなく、それぞれの学年間の接続にも改めて着目し、子どもと保護者が、ゆるやかに、なめらかに次の学年へとつながっていくことの大切さを再確認し、実践に生かしたことは大きな変化であった。

また、子どもの育ちを丁寧に捉えていく中で、「子どもは関わり合いの中で育つ」ということを重視し、「関わり」の視点で教育課程を編成した。これによって、教師間で子どもたちの姿や関わり合い、出来事を共有していこうとする連携が強まっていった。そして、学年にとらわれず、学年を越えて育ちを語り合うような保育実践へとつながったと言える。

さらには、地域とのつながりを意識し、三園合同研究会を継続的に行うと共に、新たに「保育を語り合う会」として、文京区公立幼稚園を始めとする他園との研究会も実施した。保育の評価を、自園や学内にとどまらず、地域に広げ、保育の質の向上に活かす一歩を踏み出すことができたと考える。

③ 保護者への効果

研究開発において、保護者との対話を重視し、保育や研究についても共に考えることを大切にしてきた。具体的には、懇談会や面談等での対話だけでなく、新たに、保育のドキュメンテーション上での付箋を介しての対話、ホットモタイム、研究だよりや学年だより等の発信等を行ってきた。これらの取り組みが、園と保護者との対話のみならず、保護者同士の対話へとつながり、お互いに支え合う姿へとつながっていった。さらに、園の保育について、教師と保護者が共に考えるという姿勢が強まり、子育てに対する保護者の意識の変容があったと考えられる。尚、卒園児（現１、２年生）保護者へのアンケートからは、教育目標を「子どもへの願い」へと変えた事は、保育について考える機会となった、とほとんどの人が回答した。対話に関しては、教師と少数複数人での懇談を希望する声もあり、今後は対話の様々な在り方をさらに検討していく必要性が示された。

④ 地域への効果

研究開発の目的の一つでもある、「地域とのつながり」については、今年度５月～６月にかけて、文京区公立幼稚園に呼びかけ、「保育を語り合う会」を実施した。地域の保育者同士が語り合える場ができたこと、そして、子どもを真ん中に置いて保育を考えるということが共有できたことは有意義であった。

（２）実施上の問題点と今後の課題

① 教育課程について

本園のこれまでの研究では、子どもの育ちは行きつ戻りつであり、あくまでも一人ひとりの育ちの過程を大切にしたいと考え、敢えて学年ごとに分けて表すことは避けて「ステージ」という考えにこだわった教育課程の編成を探究してきた。しかしながら、社会に開かれた教育課程の編成を目指そうとする本研究においては、保育者のみならず、保護者も巻き込みながら、子どもを真ん中に保育を構築していくことが必要であり、広く子どもと関わる大人たちにとって、分かりやすいものであることも重要であると考えた。その結果、最終的に、縦軸に「自分、人、もの・こと」とのかかわりを置き、横軸を学年別に整理して示した今回の教育課程の編成に至った。関わりを視点におくことで、子どもの主体的な生活を意識においた内容となり、年齢別にしたことで、子どもの育ちの見通しが持ちやすいものになったと考える。しかし、教育課程には表しきれない学年間の段差を捉えた、教師の関わり、環境構成のありようが新たな課題となった。

また、２歳児からつながり、小学校へと紡がれていくような、子どもの育ちの連続性を考慮した教育課程の編成が、本研究のテーマであり、３歳児の入園前後に重なる入園接続期カリキュラムと卒園から小学校入学後を意識においた幼小接続期カリキュラム、そして、３歳児から５歳児の教育課程の３つがそろって初めて、本研究のテーマに即した教育課程を示すことが可能になる。こうした考えは、『幼保小の架け橋プログラム』にもつながるものであろう。入園接続期カリキュラムでは、「身体性に意識をおき、子どもと関係をつくっていく」、幼小接続期カリキュラムでは、「身体性に意識をおき、子どもたちの関係を支える」とし、いずれも、子どもと教師の「身体性」をキーワードに掲げた。子どもたちが教師との信頼関係を基盤に、安心して、主体的に、身の回りの人や、もの、ことと出会い、関わりを広げていくことができるような教師自身の身体のありよう、関わりのありようを探究し、具体的に示す内容になっている。この２つのカリキュラム作成によって、その間にある３歳児から５歳児の保育においても、教師の身体を通した関わりが大事であることに改めて気付くことができた。今後も、子どもの育ちの連続性や育ちのプロセスを意識に置き、身体を通して子どもと関わり合う保育の日常を、具体的に発信していくことが、本園に求められている大きな課題であると考える。保育記録のさらなる工夫や、対話の場の探究を重ねつつ、子どもを真ん中に置いた保育者や保護者、地域とのネットワークの構築を目指したい。

② 評価の在り方について

子どもの遊びや姿を通して、保育者同士が記録の上での対話や実際の語り合いを大切にしながら、本園の教育目標である「子どもへの願い」に立ち返り、保育の省察を重ね、次のよりよい保育に活かしていく営み、それが本園の保育の評価観である。ただし時に保育者同士の対話や語り合いによる評価は、主観的な考え方に陥ることも出てくるかもしれない。そこで、例えば、地域の乳幼児施設の保育者、小学校教師や大学教員を招き、実際の子どもの姿を見て評価してもらう体制作りや、教育課程やカリキュラム編成に活かす保護者アンケートの項目再編成など、子どもの豊かな育ちにつながる評価の在り方を探究し続けたい。

③ 社会とのつながりについて

三園合同研究会や保育を語り合う会を実施することで、地域の幼稚園や乳幼児施設との交流、情報交換、保育研究等に取り組んできた。引き続き、地域とのつながりを意識しながら保育の発信、対話に努めていきたい。地域の子育て中の保護者に向けて、大学附属の利点を生かし、大学と３園が連携協力して「子育ち・子育て支援プログラム」を開発し、実施に結びつけることが早急の課題である。現時点では、大学教員や保育者による講話や子育て相談、『育育手帖その１～３』に基づく、保育者を交えた親同士の語り合いなどを考えている。

学校等の概要

１　幼稚園名、園長名

お茶の水女子大学附属幼稚園（オチャノミズジョシダイガクフゾクヨウチエン）　　園長　小玉（コダマ）　亮子（リョウコ）

２　所在地、電話番号、ＦＡＸ番号

東京都文京区大塚２－１－１
電話　03-5978-5881　　FAX　03-5978-5882

３　学年別幼児数、学級数

３歳児		４歳児		５歳児		計	
幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数
３９	２	６０	２	５２	２	１５１	６

４　教職員数

園長	副園長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
１	１	０	０	０	７	０	１	０	０	３

ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
０	１	１	０	１５

５　研究歴

（１）文部科学省関係

平成 13～15 年度　研究開発指定校
平成 17～19 年度　研究開発指定校